

# 自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (10)

久 居 宣 夫 \*

Notes on Newly or Rarely Observed  
Animal Species in the Institute  
for Nature Study (10)

Nobuo Hisai \*

## は じ め に

今回は、1997年1月～1997年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居，1997）までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」（国立科学博物館附属自然教育園，1984）中で、r：“稀”，または（r）：“古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日と目撃または捕獲地点および目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、日頃より種々のご教示と同定をいただいた東洋大学の野正男教授、国立科学博物館動物研究部の大和田守氏ならびに貴重な記録を提供して下さった方々に感謝の意を表する次第である。

## 1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

*Bambalina* sp. クロツヤミノガ（鱗翅目 ミノガ科）（1997.5.30 インセクトリウム内）大和田守氏同定  
インセクトリウム内（図1参照）に植栽されているエノキで、羽化したばかりの雄が捕獲された。本種の幼虫のものと考えられる糞はこれまでも同所内で少なからず観察されていたが、成虫が得られたのは今回が初めてである。

インセクトリウム内には、園芸種を含む種々の植物が自然教育園外から持ち込まれ植栽されているた

---

\* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

め、本種がそれらに付いて移入したものか、あるいは園内で自然分布していたものか明らかではない。

本種は本州・四国・九州・対馬・屋久島・沖縄本島などに分布し、幼虫はブナ・ニレ・バラ科などの多くの樹木や低木につくという (井上, 1982)。

*Apomecyna naevia* Bates

カノコサビカミキリ (鞘翅目 カミキリムシ科) (1997.8.14 食草園 大野正男氏)

本種は、大野正男氏によって食草園にいた個体が確認された。国内では本州・四国・九州・屋久島・種子島に分布する (大林, 1963; 林, 1984) が、小島・林 (1969) によれば西南日本の暖帯林地域に限られ、カラスウリの枯づるに

多いという。しかし、横浜市 (小笠原, 1990) や京都市 (芦田・中村, 1991) などの内陸部でも本種が記録されていることから、これらが移入された可能性はあるものかなり分布を広げているものと考えられる。

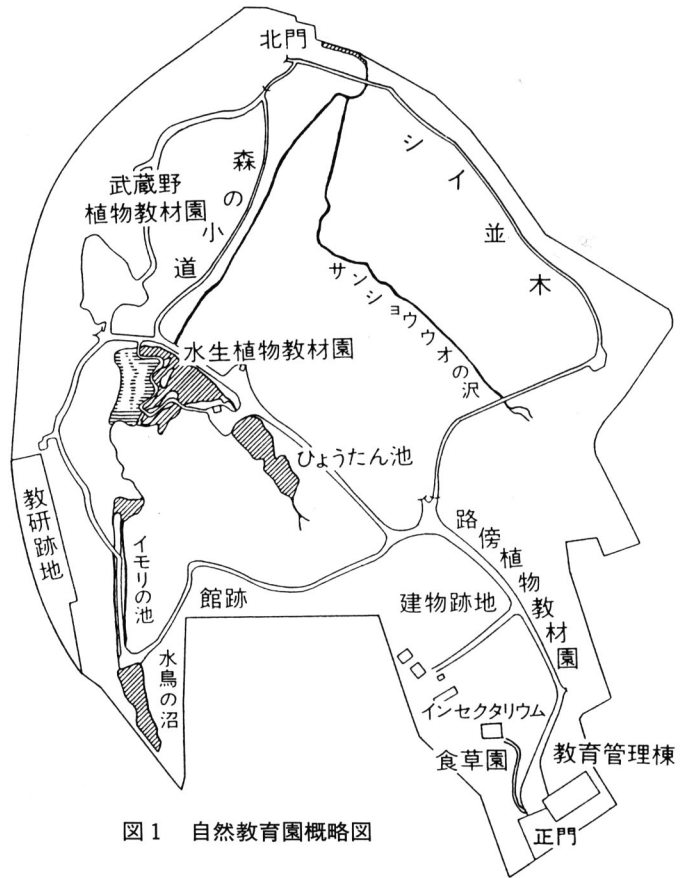


図1 自然教育園概略図

## 2. 稀種の記録

### (1) 昆虫類

*Polycanthagyna melanictera* Selys ヤブヤンマ (蜻蛉目 ヤンマ科) (1997.4.17 武蔵野植物教材園)

本種は上記教材園にある小池で中齢幼虫が2個体捕獲されたものである。本園では1989年と1991年にも同所で成虫および羽化殻が観察されており (久居, 1990, 1993), 毎年ではないかもしれないが飛来した個体によって繁殖していると考えられる。

幼虫はおもに丘陵地や低山地の樹陰の池沼・水たまりに生息し、雌はこれらの水際から少し離れたコケ類や泥中に産卵するという (浜田・井上, 1985; 石田他, 1988)。

*Iridopteryx maculata* Shiraki ヒナカマキリ (直翅目 カマキリ科) (1997.9.2 教育管理棟裏 桑原香弥美氏; 同 10.22 教育管理棟内車庫)

本種は普通種であるが、園内での観察例が少ないので記録しておく。今回の記録はいずれも教育管理

棟周辺で観察されたものであるが、ふつうは照葉樹林の林床に生息する。

本種の分布はシイ・タブ林の分布とほぼ同じで、日本海側は山形県吹浦、太平洋側が東京都心部あるいは千葉県木更津市を北限としそれより南西地域に生息する(日浦, 1977; 山崎, 1996)。

本種は、台湾では長翅の雄が生息するが、国内では雌のみが知られ単為生殖をされるとされる(日浦, 前出)。しかし、山崎(前出)によれば、雌雄は形態的によく似ており、国内でも雌雄とも生息し両性生殖をするという。卵鞘は3mm程度の大きさで、おもに樹幹のはがれかけた樹皮下に産付されるが、筆者は以前アカガシの落葉上に産付された卵鞘を観察したことがある(図2)。



図2 アカガシの落葉上に産付されたヒナカマキリの卵鞘

*Cryptotympana facialis facialis* Walker クマゼミ(半翅目 セミ科)(1997.8.1, 同 8.3 以上食草園; 同 8.5 矢野亮氏; 同 8.29 水生植物教材園 大澤陽一郎氏)

8.1~8.5の記録は同一個体の可能性もある。本種は毎年夏季に2~3回鳴き声が聞かれるが、1997年は例年より比較的多いようであった。因みに、筆者の自宅(東京都青梅市)では稀に鳴き声が聞かれる程度であるが、1997年には8.9, 8.10, 8.23, 8.27に記録された。また大阪でも1997年はセミ類の発生が多く、クマゼミは1996年と比較して個体数で約3倍多かった(桂・奥野, 1997; 初宿他, 1997)。

本種は国内では本州(東京以西)~九州・奄美大島・沖縄本島などに生息し、平地や市街地に多く、近年は都市部で増加している(宮武・加納, 1992)。また、本種は発生の末期には雄が遠距離移動することも知られており(宮武, 1977)、長野県富士見町で8月下旬に鳴き声が聞かれた記録がある(岡田, 1996)。

*Parachauloides japonicus* McLachlan ヤマトクロスジヘビトンボ(脈翅目 ヘビトンボ科)(1997.6.2 公務員宿舎 菅原十一氏)

本園に隣接する公務員宿舎の敷地内で死亡していた個体を菅原十一氏が拾得し、筆者によって本種の雌と同定された。この個体は園内で発生したものが逸出して死亡したものと考えられるので、ここに記録しておく。本種の個体数は少なく、稀に園内で見られる。

本種は本州・四国・九州・南西諸島および台湾に分布し、幼虫はおもに溪流や池沼の水際に生息する。幼虫期間は丸2年(あしかけ3年)と推定されているが、生活史についての詳細はまだ不明である(林, 1990)。

*Papilio helenus* Linnaeus モンキアゲハ(鱗翅目 アゲハチョウ科)(1997.5.4 路傍植物教材園)

本種はほぼ毎年数回目撃される。今回は路傍植物教材園を飛翔していた個体の記録である。例年7月下旬~9月上旬の記録が多い。今回のように5月初旬の記録は少なく、過去に1989.5.5と1996.5.14の2例が記録されているだけである(久居, 1990, 1997)。

*Rapala arata* Bremer トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1997.4.17 水生植物教材園, 同 4.20 路傍植物教材園; 同 4.25 建物跡地 矢野亮氏)

本種も最近毎年のように目撃される。4.17の記録は水生植物教材園前のベンチおよびイボタノキの周辺で、新鮮な個体が飛翔あるいは休息していたものである。本園ではインセクトarium付近で目撃されることが多い。

*Curetis acuta* Moore ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1997.10.7 水生植物教材園 矢野亮氏; 同 10.18, 10.25, 10.29, 11.4 以上インセクトarium, 同 11.9 正門付近)

本種は秋季の目撃記録が多いが、夏季にも見られることから園内で繁殖していると考えられる。10.18~11.4は、晴天時にインセクトariumの裏で同じ場所を飛翔したり休息していた雄の目撃記録である。本種は同一個体が同一場所を何日間か占有する行動が知られているので(福田他, 1984), 上記の個体は同一の可能性が大きい。

*Parantica sita* Kollar アサギマダラ (鱗翅目 マダラチョウ科) (1997.10.3 矢野亮氏; 同 10.7 斎藤静代氏 以上路傍植物教材園)

いずれも路傍植物教材園のタイアザミに訪花し、吸蜜していた比較的新鮮な個体の記録である。10.7の記録は、入園者によって撮影されたチョウの写真が後日筆者に送付され、同定を依頼されたものである。

*Cynthia cardui* Linnaeus ヒメアカタテハ (鱗翅目 タテハチョウ科) (1997.9.28 水生植物教材園 吉井三恵子氏)

本種は水生植物教材園のノハラアザミで吸蜜していた個体を吉井氏が写真撮影したものである(図3)。

これまでの記録から、本種が園内で繁殖しているのは確かであると考えられるが、発生個体は少ないらしく近年目撃例が減少している。



図3 ノハラアザミで吸蜜するヒメアカタテハ (吉井三恵子氏撮影)

*Vanessa indica* Herbst アカタテハ (鱗翅目 タテハチョウ科) (1997.8.7 食草園 大澤陽一郎氏; 同 10.14 武蔵野植物教材園 矢野亮氏; 同 10.18 教研跡地)

本種は記録はあるものの長期間目撃記録が途絶えていたチョウの一種であるが、1995年以降は毎年目撃されている。

本種は再見された1995年の記録が秋季だったこと、幼虫の主要な食餌植物のカラムシが園内にほとんどないことなどから、園内では継続的な繁殖の可能性は少ないと考えられた(久居, 1996)。しかし、今回夏季・秋季ともに新鮮な個体が観察されたことから、園内で繁殖している可能性も十分にある。

*Adris tyrannus* Guenée アケビコノハ (鱗翅目 ヤガ科) (1997.10.29 建物跡地 桑原香弥美氏)

本種は建物跡地にいた比較的新鮮な個体を桑原氏が捕獲し、筆者による同定後園内に放逐した。

本種はアジア暖温帯に固有の種で、日本および沿海州・中国・台湾・インドに分布する (杉, 1982)。平地では普通種であるが、園内では発生が少なく稀に目撃される程度である。

幼虫の食餌植物は主としてアケビ科のアケビ・ミツバアケビ・ムベである (杉, 前出)。このほかアオツツラフジ・コウモリカズラ (以上ツツラフジ科)、ヒイラギナンテン・メギ・ヘビノボラズ (以上メギ科) が知られている (宮田, 1983; 山本・杉, 1987)。園内にはアケビ類やムベが多く生育しており少数が発生を繰り返していると考えられる。

成虫はブドウ・リンゴ・モモなどに孔をあけて吸汁するため、これらの果実にかなりの被害を与えることがあるという (杉, 1959)。

## (2) その他

*Gekko japonicus* Duméril et Bibron ニホンヤモリ (トカゲ目 ヤモリ科) (1997.4.9 教育管理棟研究室内 矢野亮氏)

本種も毎年よく観察される。今回は研究室内にいた頭胴長27mm, 全長60mmの幼体の記録である。

*Elaphe conspicillata* Boie ジムグリ (トカゲ目 ナミヘビ科) (1997.5.17 武蔵野植物教材園 矢野亮氏; 同 6.17 建物跡地)

5.17の記録は、武蔵野植物教材園の小池でヒキガエルの幼生を捕食している個体を矢野氏が偶然目撃したものである。本種はふつつハタネズミやヒミズなどの小哺乳類を捕食している (千石, 1979) ので、かなり珍しい目撃記録といえる。

## 引用文献

- 芦田久・中村知史. 1991. 京都市内で採集されたカノコサビカミキリ. 月刊むし, (250):17.
- 福田晴夫他 8 名. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (III). 373pp. 保育社.
- 浜田康・井上清. 1985. 日本産トンボ大図鑑. 第 2 巻解説編:129-291. 講談社.
- 林文男. 1990. ヤマトクロスジヘビトンボの生活史と分布. 採集と飼育, 52(9):396-399.
- 林匡夫. 1984. カミキリムシ科. 「原色日本甲虫図鑑 (IV)」(林匡夫他編著), 1-146. 保育社.
- 久居宣夫. 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
- 久居宣夫. 1993. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(5). 自然教育園報告, (24):1-8.
- 久居宣夫. 1996. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(8). 自然教育園報告, (27):21-25.
- 久居宣夫. 1997. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(9). 自然教育園報告, (28):27-31.
- 日浦勇. 1977. カマキリ科. 「原色日本昆虫図鑑 (下)」, 全改訂新版 (伊藤修四郎他編), 47-48. 保育社.
- 井上寛. 1982. ミノガ科. 「日本蛾類大図鑑第 1 巻 解説編」(井上寛他著), 158-162. 講談社.
- 石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 72pls+105figs+140pp. 東海大学出版会, 東京.
- 桂孝次郎・奥野晴三. 1997. 「韮公園のセミのぬけがら調べ '96」. Nature Study, 43(8):8-9.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.

- 小島圭三・林匡夫. 1969. 原色日本昆虫生態図鑑 (I) カミキリ編. 294pp. 保育社.
- 宮田彬. 1983. 蛾類生態便覧 (上巻). 668pp. 昭和堂印刷出版事業部, 長崎.
- 宮武頼夫. 1977. セミ科. 「原色日本昆虫図鑑 (上)」, 全改訂新版 (伊藤修四郎他編), 136-143.
- 宮武頼夫・加納康嗣. 1992. 検索入門 セミ・バッタ. 215pp. 保育社.
- 小笠原隆. 1990. 横浜市鶴見区におけるカノコサビカミキリの記録. 月刊むし, (237):39.
- 大林一夫. 1963. カミキリムシ科. 「原色昆虫大図鑑第2巻 (甲虫篇)」 (中根猛彦他著), 267-318. 北隆館.
- 岡田朝雄. 1996. 長野県富士見町でクマゼミの鳴き声を聴く. 月刊むし, (299):36.
- 千石正一編. 1979. 原色両生・爬虫類. 206pp. 家の光協会, 東京.
- 初宿成彦・桂孝次郎・奥野晴三. 1977. この夏, セミは2年ぶりの大発生. Nature Study, 43(10):8-9.
- 杉繁郎. 1959. ヤガ科. 「原色昆虫大図鑑 (蝶蛾篇)」井上寛他著, 105-159. 北隆館.
- 杉繁郎. 1982. ヤガ科. 「日本蛾類大図鑑第1巻 解説編」 (井上寛他著), 669-913. 講談社.
- 山本光人・杉繁郎. 1987. ヤガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」 (杉繁郎編), 185-239. 講談社.
- 山崎柄根. 1996. ヒナカマキリ. インセクタリアム, 33(11):13.

---

#### 訂正

前報 (久居, 1997) で“コミスジは「昆虫目録」 (鶴田他, 1952) に登載されているが, その後全く目撃記録がなく本園では絶滅したと考えられる”と記述した。しかし, その後桜井他 (1972) の報文によって本種は1970年頃まで稀に目撃されていたことが判明したので, ここに訂正しておく。

#### 参考文献

- 桜井信夫・久居宣夫・夏目節子. 1972. 自然教育園の蝶類について. 自然教育園報告, (3):27-33.